

243) 遠い幻 99. 12. 19.

川沿いの水の町には ^{にぎ}賑やかに人が行き交い

^{きまぐれ}気紛れを拒否するように 整然と蔵が並んだ

行きずりの心を捨てて 束の間の時を惜しめば

^{とうとう}蕩々と流れに沿って 思い出は遠い幻

飾り気を忘れたような なだらかな坂の町には

行き来する人影もなく 砂利道が山に続いた

静寂を突き破るよに ^{きびたき}黄鶯の声は横切り

この道に別れを告げて 人生は遠い幻

山沿いの無口な町は 雪の中時が止まった

そびえ立つ岩の向こうに 燃えながら日が沈んだら

凍りつく闇に吞まれて 人は皆はぐれてしまう

過ぎ去りし全てのことは 今はもう遠い幻

ひとときの眠りにつけば 寂しさの痛みが走る

誰だって心の奥に 閉ざされた部屋があるから

風が吹く寒さの日には 逃げ込んで明日^{あした}を探す

若き日に命を懸けた あの人は遠い幻

